



16

「紙」

紙とにらめっこしている。先日自分がやっている番組で、『ノートにアイデアを毎日書くことで創造性^{そうぞうせい}が伸びる』という内容を取り扱ってから、意識して実践している。おそらく、頭に思い浮かぶことを手書きで記していくことに意味があるものと思われる。実験を行った大学の学生のみなさんの創造性が向上しているデータがあるのとこので、試さない手はない。ただ僕の場合、紙と言ってもノートではなく、便箋^{びんせん}を使う。以前、真っ白の便箋を買ったのだけれど、あまり使い道がなく、このたび適当な紙を探している折、棚から、「今こそボクを使ってくれ」という声が聞こえた気がして、手に取ってみたのだ。

立派な紙である。和紙のようにざらつきがあり、どこか人のぬくもりが感じられる。何も書くことなんて決めていないのに、こんな上等な紙じゃもったいないという思考が働いたが、それでは本末転倒。下書きがすでにあって、なるべく上手な字を意識して、清書^{せいしょ}としてただ書きうつすのではあまり意味がない。そんな気がした。多少、荒っぽさあっても、誤字脱字^{ごじだつじ}があっても構わない。思考にさかわらず、思うままに川の流れのごとく書いてこそ、脳のどこかに眠っているアイデアというものが湧き出てきそうではないか。

とはいったものの、なかなか最初の一文字が出てこない。そもそも、何も考えずに用もなく便箋を机の上に並べたのなんてこれが初めてだ。手紙はふつう、書く時には宛

先がきまっている。これではいけないと思い、便箋という形式からヒントを得て、手紙を書くことにした。そういえば今日は朝から、なぜだか思い出す人がいた。『なんでこの記憶が今？』そんな感じた。理由は思い当たらない。強いて言えば天気、季節のせいかもしれないし、最近見た夢のせいかもしれない。でもどうにも確かめようがないから、結局『なんとなく』で済ませる。

これはある種のトレーニングなんだし、とりあえず何か書こう。タイピングよく思い出しちゃったんだから、その人に対してなにか書こう。しかし、ペンを握れども、これといった感情が湧いてこない。仕方がないから、ただ過去の事実だけを書くことにした。『その人とこんなことをした』、『こんなことがあったときにその人も近くにいた』など。すると不思議なことに、忘れかけていた記憶が少し色づき、感情が動きはじめた気がした。

でも、実際に便箋に記されたのはその繊細な感情の部分ではなく、相変わらず、小学生でも書けそうなレベルのひとつこと日記のような文章だけ。それなのに、感情は『かつて』と『今』を行ったり来たりしている。

机の前で紙を前にし、沈黙ちんもくしている自分がいる。心はどこかに旅をしているようだ。

紙に書かれなかった言葉たちが、今もここに漂ただよっている気がする。たとえば、「元気ですか」とか、「なぜかわからないけどさっき君を思い出したよ」とか。相手からした

ら、そんな連絡をもらっても返事に困るような、ほんの小さな、生活の端のようなこと。

実際に書いたところで、あなたの住所もわからないのだけれど。

でも不思議なもので、誰かに宛てるつもりで机に向かったら、自分の輪郭が少しだけ見えた気がした。「あ、いま自分はこういう気持ちなんだ」って。

だからこれは、誰かのためというより、自分のための手紙だ。自分に宛てた手紙とも言えるかもしれない。

太陽が昼の光になってきて、部屋の隅が柔らかく影を持ち始める。

書かなかったけれど、思い出された感情は、たぶんずつとここに残るだろう。夏が来て誰かの浴衣姿を見るたびに思い出す祭の匂いみたいに。

その感情は、今日ふと棚から取り出された便箋のように、ときどき何かの役に立てれば、それでいいのかもしれない。